第２　教育研究団体の意見・評価

①　日本地理教育学会

（代表者　池　俊介　　会員数　約500人）
ＴＥＬ　042-329-7729

地　　理　　Ａ

１　前　　文

令和６年度大学入学者選抜に係る大学入学共通テスト問題作成方針では，「高等学校学習指導要領を踏まえて，知識の理解の質を問う問題や，思考力，判断力，表現力等を発揮して解くことが求められる問題を重視する」とある。また，「問いたい力が，高等学校教育の指導のねらいとする力や大学教育の入り口段階で共通に求められる力を踏まえたものになるよう作成する」とも示されている。さらに，「『主体的・対話的で深い学び』の実現に向けた授業改善のメッセージ性も考慮し，授業において生徒が学習する場面や社会生活や日常生活の中から課題を発見し解決方法を構想する場面，資料やデータ等を基に考察する場面など，学習の過程を意識した問題の場面設定を重視する」と示されている。これらの方針は現在の学校現場で行われている地理の学びの方向性と一致するものである。以下では，これらの観点を基に，受験者の日頃の学習成果が適切に評価できる問題であるかの観点で考察していきたい。なお，本年度の問題総数は 30 問で，昨年度と同様，５大問構成，問題の分量は適切で，基礎的な問題が多い。

２　試験問題の程度・設問数・配点・形式等への評価

第１問　地理的技能の活用と日本の自然災害と防災に関する大問である。ホモロサイン（グード）図法の読み取りや，地理院地図より作成した陰影起伏図，空中写真と地理院地図，主題図，地形模式図と景観写真を用いた設問があり，いずれの問題も基本的な知識や技能を問うもので，難易度は標準的である。

問１　ホモロサイン（グード）図法の特徴と用途に関する基本的な問題である。①と②は図を見て確認することができると，容易に正誤判定できる。本問は基本的な問題である。

問２　地形図の等高線から尾根と谷を読み取ることができるかをみる問題である。区域Ｆを**ウ**と判断するのは容易であるが，区域ＧとＨの判断にやや時間がかかると考えられる。地図学習で，紙の地形図に尾根や谷を書き込んだり，地理院地図の陰影起伏図を用いたりした学習経験があれば解答を導き出しやすい。陰影起伏図を用いて出題する際，今後とも図の濃淡に十分留意していただきたい。

問３　空中写真と地形図を対比しながら，土地利用の変化を読み取ることができるかをみる問題である。各選択肢の内容を，空中写真や地図と照合しながら確認することができれば，容易に正誤判定を行える。空中写真も同様であるが，出題の際，図の濃淡に十分留意していただきたい。

問４　日本列島に値の大小を濃淡で示した図から，気温か降水量，２月か８月かを判定する問題である。地域による濃淡の違いが明確で日本海側が濃く着色されている④を冬季の降雪と判断することができれば，容易に解答を導き出せる。④のみで解答を導けてしまうことと，①と③の違いが明瞭でないことから，選択肢の工夫が必要であると考える。

問５　地形模式図をもとに，どのような自然災害が起こるかを考えさせる基本的な問題である。地理の教科書にも地形模式図と自然災害との関係が示されているため，容易に解答できる問題と考える。

問６　火山災害，とくに噴石による被害の軽減を目的とした施設に該当する景観写真を選択できるかをみる問題である。火山災害や風水害への対応について教科書に記述があり，容易に解答できる問題と考える。

第２問　「世界の生活・文化」に関する大問である。食文化を中心として，さまざまな視点から問うている。食生活だけでなく，食器の素材と環境問題を絡めた問題が出題されるなど，幅広い知識が必要になるが，難易度は全体を通して易しいといえる。他の大問と同様に，図や資料の読み取りが求められ，思考力，判断力が問われる問いが多い。

問１　1963年と2013年の地域別のカロリーの供給量と小麦と米の供給量に関する問いである。肉類の割合の増加から年代別の読み取りは容易である。また東アジアでの小麦の供給量の増加が理解できれば，難しくはなく，基本的な問題といえる。

問２　写真がやや見にくいが，南インドの定食であるミールスであることが読み取れる。インドの料理であるという知識は必要である。品目別の供給量から，各国の特徴を捉えることができれば解答が可能になる。複数の知識が必要であるが難易度は標準的であるといえる。

問３　北アメリカにおいてファストフードの増加により，肥満などの生活習慣病が増加したことや，ヨーロッパにおいて移民が増加し，さまざまな文化が流入してきているという知識があれば，解答可能であるため，非常に易しい問いである。

問４　食器に描かれた絵をよく見て，説明と対応させる問いである。多くの知識は要さずに，解答可能で，むしろ思考力・判断力が問われている。食器が，３つの国（もしくは地域）のどこの物かを問う方が，地理の問題としてふさわしいように感じる。容易に解答可能であるといえる。

問５　年代別のプラスチック素材の生産量を示す地図と説明の正誤を問う問いである。地図の読み取りが正しくできることと，工業化の時代背景の知識が必要になる。プラスチックの生産自体が，先進国から発展途上国に移っているので，高い技術力が必要という矛盾点に気づくことができれば，解答が容易であるといえる。

問６　問題文にあるように「会話文」だとするならば，もう少し３者の会話が欲しいところである。単に会話から調査によって明らかにできることを読み取るだけであり，地理的な見方や考え方よりも，文章の理解力の方が問われる問いである。解答が容易な問いであるといえる。

第３問　ヨーロッパの地誌に関する大問である。図表や主題図，景観写真などの読み取りを通じて，地理的技能や思考力を問う問題から構成されている。昨年度は知識を問う要素が多かったが，本年度は知識を問うだけで終わらずに図の読み取りも踏まえた上で判定させる問題があり，出題方法に一工夫みられたが，良問が少ない点は引き続き改善の余地があると思われる。難しめの問題はなく，大問全体でみればやや易しめから標準的なレベルの問題である。

問１　地形の景観写真から，場所を判定する問題である。それぞれの地点の地形の特徴を把握していなくても，図の陰影のみで容易に解ける問題である。大学受験の問題であることを考慮すると，出題方法にもう一工夫欲しい。

問２　内陸水運に関する正誤問題である。図の読み取りと知識を組み合わせて解く問題。問われている内容は難しくなく，標準的なレベルの問題である。

問３　農産物に関する問題である。気候や農業の特徴を把握していれば，解答を導きやすい問

題。センター試験時代からみられる出題方法ではあるが，学習してきた受験者の努力が反映される。標準的なレベルの問題である。

問４　旅行に関する問題である。観光より幅広い観点から到着客数や収入・支出について示しているが，それぞれの国の気候や観光地，バカンスの特徴を踏まえていれば解ける問題で，標準的なレベルである。

問５　ＥＵの加盟状況と一人当たりＧＤＰに関する正誤問題である。図の読み取りと，ＥＵ加盟後の東ヨーロッパの変化を把握していれば解ける問題。やや易しめの問題である。

問６　幾つかの指標から国家群を判定する問題である。それぞれの国家群の特徴を踏まえていれば解ける問題。標準的なレベルの問題である。

第４問　地球的課題と世界の結び付きに関する大問で，前者と後者はそれぞれＡとＢの問題群に分かれた２部構成となっている。前者については，４つの小問が設定されており，人口，食料，環境，国際協力と小問ごとに異なるテーマが出題されている。また，後者については，２つの小問が設定されており，交通，貿易と小問ごとに異なるテーマが出題されている。各小問は，グラフ，主題図，統計などの資料を読み解き，そこから判断したことを選択肢と合致させて正解を導いていく形式が６問中５問と大半を占めており，基礎的な知識をベースに思考力・判断力が求められる類のものであった。問題の難易度としては標準的なものと判断できる。なお，本大問は，次年度からスタートする新課程入試を意識し，最近の傾向として広がりつつある探究活動を想定した形式を採っておらず，センター試験時代の主流であった出題形式にゆり戻された感がある。

問１　世界諸地域（アフリカ，オセアニア，東南アジア，ヨーロッパ）における1980年～2019年の出生率と死亡率の推移についてグラフを考察した上で，ヨーロッパに該当するものを選択する問題である。諸地域における経済発展の度合い，医療や公衆衛生等の充実，少子高齢化の状況を考慮に入れることができれば解答はさほど難しくはない。

問２　「栄養不足人口の割合」，「穀物自給率」，「18歳以上人口に占める肥満人口の割合」を国・地域別に示した３種類の世界地図を比較考察した上で，該当する組合せを選択する問題である。農畜産物の生産量，農業技術の水準，経済発展の度合い，食文化の特徴といった観点を考慮に入れることができれば解答はさほど難しくはない。

問３　アラル海の水域について1989年時点の地図と2014年時点のそれとを比較しながら，水域変化の様子とその背景，環境への影響，対応策などについて記された文章を読み解いた上で，適当でない下線部分を選択する問題である。同海を取り巻く状況については多くの教科書等で取り上げられており，環境問題の典型例として位置づけられている。ゆえに，受験者にとっては親和性の高いテーマといえる。干上がった湖底で大規模農業経営を実施するには，大量の水を必要とすることから乾燥気候下にある同海水域では現実的ではない。そのことが理解できれば解答は容易といえる。

問４　発展途上国の農林水産業の発展と環境保全の両立へ向けた先進国政府ないしは民間組織が行う取組として適切なものを，４つの文章から選択する問題である。文章を読めば常識の範囲内で解答可能といえ，かなり平易な問題といえる。

問５　日本，アメリカ合衆国，インド，オランダにおける航空貨物輸送量における国際線と国内線との内訳を示した統計からインドに該当するものを選択する問題である。航空貨物の特性や各国の輸送量の規模や国土面積を考慮に入れることができれば解答はさほど難しくはない。

問６　世界の複数の地域間（北アメリカ，西アジア，ヨーロッパ，アジア・オセアニア）にお

ける石油の輸出元と輸出先を示した輸出入量の統計から北アメリカと輸出先との組合せを選択する問題である。西アジアが石油の輸出元の地域として先進国や新興国を包括した世界諸地域を輸出先として位置づけていることが理解できれば，選択肢を推測するのは容易であるといえる。

第５問　入間市を含む埼玉県南西部を中心とした地域調査に関する大問である。地形図読図や新旧地形図の比較といった，地形図を基にした出題はなかったが，対象地域を多面的・多角的に捉えようとする問題構成になっている。解答を迷いなく導ける問題が多く，難易度は標準よりもやや易しめであったと判断できる。

問１　地形を分類して示した地図を参考に，地形断面を判断する問題である。従来の断面図と異なり，起点から相対的に高低差を示した図となっている。丘陵地や低地の部分を基にして判断できれば解答できる。また，図中の線Ｂは起点から終点まで終始台地を通過しているが，地図全体を見て，複数の谷に並行して，山地付近から低地に向かって標高が下がるようすを問う側面もみられ，想像力を働かせて考察させようとする部分も評価できる。総じて，断面図の読み取りはさほど難しくない。

問２　雑木林の景観の写真を見て，地域の雑木林の役割や利用方法について考察する問題である。下線部Ｅでは，「1960 年代頃まで」のいわゆる高度経済成長に入るまでの時代背景が，下線部Ｆでは，これまでの都市開発から「雑木林を保全」する動きへと変容したようすから，容易に解答を導くことができる。景観をもとに地域の変容を考察させる問題は，地域調査の設問としてふさわしいといえる。

問３　茶の生産量上位２県（鹿児島県，静岡県）と入間市が属する埼玉県の３県について，茶に関する資料を比較しながら考察する問題である。日本の気候区分からの判断，提示された統計の処理，入間市における茶生産の方法や取組に対する考察といった，総合的な観点から地域的特色を扱った問題となっている。難易度としては平易で，問題として成立はしているものの，正答となる下線部③について，入間市のスケールで考察する場面設定にも関わらず，埼玉県のスケールで示された資料で判断させることが果たして良いのかどうかは，地域調査における設問として疑問に残る。

問４　関東地方における高速道路を開通時期別に示した図，環状道路沿線地域と臨海地域における大規模物流施設の立地数を開設時期別に示された表から，会話文の空欄に当てはまる内容を判断する問題である。第３次産業の基本的な学習ができていれば解答でき，難易度は標準的である。

問５　入間市周辺における２時点の土地利用を表した新旧のメッシュ図を見て，旧図（1976 年）と建物用地の凡例を判断する問題である。入間市が東京大都市圏の郊外に位置しているため，人口流入に伴い，過去と比較して森林面積が縮小していることに気付けば，２時点の年と２つの凡例は判断できる。上記は，問１の図１，問６の図５が解答の手がかりになっているがゆえの指摘だが，見ずとも解答は可能で，難易度は標準的である。

問６　入間市における，推計も含めた人口推移の図，1995 年と 2015 年の年齢別人口構成の図を見て，今後生じると予想される問題と，それを食い止める自治体の対策を判断する問題である。図から年少人口の減少が予想されることは読み取れるものの，まちのコミュニティの場となる小規模な公園を撤去することが適当でないことは容易に気付く。

３　総評・まとめ

出題内容は，「地理Ａ」の範囲として適当であり，基礎基本を押さえて解答させる出題であった。

出題分野もバランスがとれており，大問の流れも適当であった。難易度は高くなく，平易なものが多かった。また，昨年度までの共通テストと比較すると，初見の資料をもとに考察する問題や，文章の量は減少しており，受験者にとっては取り組みやすい問題であったと推察される。一方で，第２問のように探究場面を想定した大問や，資料を基にその背景や要因を考察する問題，資料から傾向性などを読み解く問題，調査方法に関する問題や，解決策に関わる問題など問題作成方針に示された出題がなされていた。共通テストの問題は現場の授業に与える影響が大きいため，今後もこのような出題を継続して欲しい。一方で，地理の知識や概念を用いなくとも，文脈や一般常識から答えを導くことができる問題も散見された。難易度を調整する役割もあるのだろうが，地理的な能力を適切に評価できる出題を期待したい。また防災の出題が薄かった印象も受けた。新課程の「地理総合」においてはメインテーマの一つとなるため，こちらの出題も期待したい。改善点はあるものの，全体として出題方針に沿って，受験者の学習成果を測ることができる出題であったといえる。

４　今後の共通テストへの要望

いよいよ次年度からは，新課程の入試が実施される。実施にあたって，本年度の問題を基に以下の３点をお願いしたい。１点目が，探究場面を想定した出題の継続である。探究場面のもとで，どのような問いを持ち，資料をどのように分析し，解決策の構想を行う出題がなされていたが，現状では各小問が独立している印象を受ける。大問を通して「課題の発見→背景の考察→解決策の構想」などの探究形式の出題になるとより良いものになると考える。２点目が，現実社会との結び付きを意識させる出題である。共通テスト移行当初では，「地理の内容がどう社会と結びつくのか」を意識した出題がみられたが，本年度ではあまり見られなかったように感じる。来年度以降の出題に期待したい。３点目が，適切な資料数や文章量にすることである。本年度は適切な分量であったが，探究場面を想定するとどうしても増加してしまう。時間内で受験者が深い考察ができるような分量の管理をお願いしたい。来年度の新課程の問題が，地理教育の現場に良い影響を与える出題であることに期待したい。

地　理　B

1　前　　文

昨年度と同様，問題数は30問，解答時間は60分である。世界の自然環境と自然災害，世界の資源と産業，都市と人口及び生活文化，南アメリカ地誌，地域調査の大問より構成され，各大問はそれぞれ６つの小問からなり，易しめの問題から難しめの問題までバランスよく設定されている。大学入試センターの問題作成方針にて，「地理に関わる事象を多面的・多角的に考察する過程を重視する」と示されているが，センター試験から共通テストに移行した当初よりも，複数の地理資料から解答を導く問題が減少している。また，「地理的な諸課題の解決に向けて構想する力を求める」ことについては，共通テストに移行した当初は探究学習を意識した模式図を用いた問題が大問の最後の問いにみられたが，本年度の追・再試験「地理Ｂ」及び「地理Ａ」では会話形式の問題文での出題になっており，新課程を意識した出題意欲が弱まったと考えられる。

2　試験問題の程度・設問数・配点・形式等への評価

第１問　世界の自然環境と自然災害に関する大問である。自然地理に関する基本的な事項が問われている。全ての問いで図表の読み取りが必要で，思考力が問われている。高校生になじみの薄い事柄や地域であることから全体的にやや難易度は高めであるといえるが，自然地理学を総合的に捉える問いが多く，良問が多いと感じる。

問１　北米，南米の太平洋側のプレート境界と震源の深さに関する問いである。解答にはそれぞれの地域での火山の分布を理解している必要がある。震源の深さまで考える必要があり，やや難易度の高い問いであるといえる。

問２　インド洋西部と太平洋中央部のそれぞれ赤道付近の季節ごとの風向に関する問いである。高校の教科書等では，インド洋東部が扱われることが多いため，受験者にはなじみの薄い地域の問いである。やや難易度が高いといえる。

問３　日本における植生の垂直分布に関する問いである。森林（植生分布）と気候の対応関係の知識があれば，解答は容易である。日本の植生に関する問いが出されるケースは少ないが，日本の自然環境の理解度を測る上で，良問といえる。

問４　地形形成を空間スケールと時間スケールで考える問いである。知識，思考力，判断力を活用する問いで，非常に良問といえる。地形形成プロセスが理解できていることが求められるが，難易度としては，標準的であるといえる。

問５　東南アジア，南アジアにおける自然災害の発生頻度に関する問いである。地域の自然環境の特徴に関する知識が求められている。プレート境界の位置や赤道の位置が理解できていれば，解答は容易である。

問６　河川の決壊と，位置による水位変化の関係に関する問いである。河川の位置による特徴を理解した上で，グラフの読み取りを要するため，知識に加え，思考力，判断力が求められる。やや難易度は高いが，自然災害を理解するために必要な知識であり，良問といえる。

第２問　世界の資源と産業に関する大問である。鉱産資源や工業製品，農産物の生産量とその貿易，そして環境問題に関する事項が問われている。図が多く用いられているが，読み取りは簡単であり，難易度は低い。

問１　石油と農産物の生産量，二酸化炭素排出量の上位の国々の分布を見分ける問題である。指標として示されている工業出荷額の図を見なくても基本的な知識で解ける問題であり，極

めて平易である。問題文に「世界の資源と産業をめぐる現状と課題」とあるが，これでは単に分布の読み取りに過ぎない。もう一歩踏み込んで，これを元にした課題の解決に向けての内容になっていれば良かったと思われる。

問２　アメリカの石油の生産と消費，輸出入についてのグラフの読み取りに関する正誤問題である。しかし，この内容ではグラフを読み取る技術は特に必要とされず，グラフを見なくてもシェール革命についての知識があれば，簡単に解答を導き出すことはできる。問題作成にあたってもう一工夫欲しいところである。

問３　３か国の工業生産の割合とその背景に関する問題である。工業製品の内訳を考え，その背景となる説明文を組み合わせるもので，共通テストらしい問題である。内訳も背景も各々明確に異なるため，組合せ問題とは言うものの，一問一答のように迷いなく答えを導くことができる。良問ではあるが，難易度は低い。

問４　３種類の食料の輸出入に関する流線図を見分ける問題である。流線の太さを量ではなく，順位で描き分けている点については珍しさを感じるが，なぜ量ではなく，順位だったのか。出題者の意図がうまく伝わってこない点が少々残念に思える。いずれにせよ，問１と同様，基本的な知識で解ける問題であり，平易である。

問５　光化学スモッグについての図の読み取りに関する正誤問題である。「地理総合」の防災を意識した問題であることは評価するが，内容そのものは一般的な常識で解くことができる。過去の重度の健康被害が生じた地域の図が示されているが，この図が無くても解答は可能である。図の活かし方に工夫が必要と思われる。

問６　世界の持続可能な資源利用や産業の有り方に関する正誤問題である。これも基本的な知識と言うよりは一般的な常識で解くことができる。難易度は低い。問題作成に際し，もう一工夫必要なところである。

第３問　都市と人口，生活文化に関する大問である。初見の図表が中心だが（問１，問２，問３，問５），いずれも基本事項を用いて解答することができる。難易度は標準的といえる。

問１　新大陸のある都市における 19 世紀後半の様子を描いた鳥観図に関する説明文から，最も適当なものを選択する問題である。鳥観図が鳥趾状三角州の形状を示すミシシッピ川であることが分かれば解答は容易である。さまざま地形について普段から，地図帳・模式図のみならず，コンピュータを用いた立体図などのツールを使って慣れておくことが大切である。

問２　ある県の３つの市町村における 65 歳以上人口の割合と他市町村への通勤率を示した図と，図の３つの市町村の特徴について説明した文についての組合せを答える問題である。65 歳以上人口の割合が低く他市町村への通勤率が高い市町村は，県庁所在都市に隣接し幹線道路や鉄道が整備されている市町村であることと，65 歳人口の割合が高く他市町村への通勤率が低い市町村は，都市から遠い山間部に位置し集落が点在している市町村であることが特定できれば解答できる。難易度は標準的といえる。

問３　シカゴ市における，地区別のアフリカ系住民の割合と，アフリカ系住民の文化から誕生したブルースが演奏される飲食店の立地の変化を示した図に関することがらについて述べた文章から，適当でないものを選択する問題である。初見の地図であるが，1940 年代後半と同様に，2000 年頃もアフリカ系住民の割合が 50％以上に拡大した地域にブルースが演奏される飲食店が分布することを読み取ることができれば解答できる。難易度は標準的である。

問４　３つの国（アラブ首長国連邦，ギリシャ，ドイツ）における外国籍人口を男女別に示した表から，女性とドイツとの正しい組合せを選択する問題である。アラブ首長国連邦は高

層ビル等の建設業に従事する南アジア出身の男性労働者が多いこと，ドイツはトルコからの移住者が男女ともに多いことなどの基本的な知識を活用すれば解答できる。難易度は標準的といえる。

問５　2010 年から 2015 年にかけて，東京都，大阪府，広島県の間で居住地を変えた人の数を年齢別（20～24 歳と 60～64 歳）に示した図から，20～24 歳と広島県の正しい組合せを選択する問題である。居住地を変えた人の数の大小から，大きいＪが 20～24 歳であると特定するのは容易である。次に３都府県から最も人が集まる**サ**が東京都，広島からは東京都への居住地変更者と同じぐらいの数だけ，距離的に近い大阪に居住地を変更した人が多いことが考察できれば解答にたどり着く。やや時間を要するかもしれないが，難易度は標準的である。

問６　アフリカ，北アメリカ，中央・南アメリカ，ヨーロッパにおけるキリスト教の人口について，宗派別に示したグラフを見てアフリカを選択する問題である。地域ごとの人口規模を考慮しないとアフリカと解答するのは難しい。地域ごとの人口規模の概数を押さえておくことが求められる。難易度はやや難しい。

第４問　南アメリカの地誌に関する大問である。雨温図の判定，各種データを使った図表の判別など，地理の基本的な出題形式で構成されていたが，なかには幅広い知識と正確な理解が求められる設問も多く，例年より難易度は高かったと考えられる。

問１　南アメリカの各地点の雨温図を判定させる問題。標高のデータがヒントとなっているものの，ケッペンの気候区分などを正確に理解しておく必要があるため，難易度はやや高かった。

問２　南アメリカの各種指標をカルトグラムで表現し，読み取らせる設問。各国のデータを受験者にとってあまり見慣れない図表で表現したことで，判定に戸惑ったかも知れないが，地理的なモノの見方を体現した良問といえる。

問３　南アメリカのコーヒー豆と大豆の各データを判別する問題。ブラジルやアルゼンチンにおける大豆生産の拡大は，時事的な内容でもあり，解答の難易度は標準的であった。

問４　南アメリカと各国における貿易関係を判別させる問題。設問にある３か国が，どのような産物を輸出入しているのか，さらに，どの国との関係が深いのかなど，多くの知識・理解を必要とする問題となっており，地理的思考力を問う設問としては，高く評価できる。ただ，それと対照的に，受験者にとってはやや難しかったと感じたのではないか。

問５　南アメリカの資源の状況から銅を判定させる問題。世界生産におけるチリのシェアの高さなどから，解答は容易であった。しかし，単に，鉱産資源の分布図から読み取らせないよう，出題に工夫がみられた。

問６　アルゼンチンとブラジルの首都の地図から特徴を読み取らせる問題。航空機の形をしたブラジリアの地図は，受験者にとっても見慣れたものであり，設問も判別がしやすかったため，解答は容易であった。

第５問　（「地理Ａ」と共通のため省略。）

３　総評・まとめ

全体的には，従前に近い出題形式となり，容易な問題から難しめの問題まで並んでいるが，なかには資料の読み取りや思考・判断に時間を要する問題も見られた。いずれの小問も図表や写真などの資料を読み取り，これまでの学習で得た知識や技能を組み合わせつつ，地理的概念や地理的課題を見出し，諸資料をもとに思考・判断する問題である。従前からも見られるように，図表や写真を

はじめとするさまざまな資料から地理情報を読み取り，思考・判断できる能力が問われている。次年度からの新課程入試を踏まえて，コンテンツだけでなくコンピテンシーを重視しているものと思われる。

探究学習を意識した出題は第２問でみられたが，大問全体としてのまとまりが薄く，小問集合の形式に捉えかねない。共通テストに移行した当初にみられた，探究学習を意識して課題解決に向けたプロセスを歩める出題を，今後の新課程入試で期待したい。

地理的な知識・技能，思考・判断を伴わない，一般常識で解ける問題も散見される。大学入試の問題であることを考慮すると，改善すべき点でもある。問題全体を見渡すと，良問が多く出題されている大問もあり，図表と文章読解のバランスも適切と思われる。引き続き，知識・技能と思考・判断の２つの資質・能力がバランスよく組み合わされた問題が，多数出題されることを望む。

４　今後の共通テストへの要望

従前から要望していることであるが，図表や写真において，配慮の必要な受験者を考慮して，グレースケールの濃淡やコントラストに工夫してもらいたい。

次に設問の工夫についてである。共通テスト移行当初の，段階を踏まえて正解を導き出す問いや探究学習のプロセスを意識した問いが減少し，センター試験時の出題に戻りつつあることは否めない。また，図表や写真の読み取りとは関係なく解答できる問いもみられ，コンピテンシーを問う要素が薄い場面もみられた。

設問の内容や切り口に関しても，改善を望みたい。共通テスト移行当初にみられたような，生徒の生活に身近な要素からの出題が減りつつある。

来年度からは新課程の試験となり，「地理総合」と「地理探究」からの出題になる。新課程における新たな学びが反映された意欲的な出題を意識し，良問が出てくることを望んでいる。共通テストは各種メディアでも注目される入試問題であるからこそ，今後の学びの形式を世間に打ち立てる意義がある。また，メディアで注目されることによって，受験者に学ぶことの意義や楽しさを引き出させることができ，主体的な学習につながっていく。

②　全国地理教育研究会

（代表者　髙橋　基之　　会員数　約300人）
ＴＥＬ　03-3958-0121

地理Ａ・地理Ｂ

１　前　　文

平均点は，本試験と比較して，「地理Ａ」はほぼ同程度であったと思われる一方，「地理Ｂ」では低めであったと思われる。追・再試験の受験者が増加している中では，難易度の調整は慎重にお願いしたい。全体としては，これまでのセンター試験や共通テスト同様，高等学校までの学習内容におおむね沿った小問が圧倒的に多く，学習範囲を逸脱した難問や奇問と呼べるものはみられなかった。また，詳細な事項を前提とするような問いも少なく，ほとんどの小問は高等学校までの学習で身に付けた基礎的な事項をもとに，地理的技能や見方・考え方を用いて考察するものであった。

２　地理Ａへの評価

追・再試験においても，各小問に図や表，写真などを含めた豊富な資料が提示され，それらの資料が提示されず文だけが提示された小問は，本試験と同様，30問中１問にとどまった。また，組合せ選択の小問が今年度も，昨年度よりは減少したものの30小問中13問を数えた。本試験同様解答には多くの時間を要した。しかし，基礎的な知識・理解をもとに思考・判断する学習の過程を意識した問も多くみられた。また，細かな知識レベルを前提とした難問もなく，適切なレベルに作問されており，そうした点への評価は高い。平均点は，本試験と同程度かやや低めと思われる。本試験，追・再試験とも，本年度以上の難化がみられないようお願いしたい。

第１問　「地理的技能とその活用，および日本の自然環境と防災」　大問のタイトルが，本試験の「地図の読み取りと活用，および日本の自然災害と防災」から変化した。自然災害や防災は重要なテーマではあるが，問４のように災害と関連させない「自然環境」の小問が加わることで作問の幅が広がったことは評価したい。一方で，問６の「被害の軽減を含む施設」が，正答とする間接的なものまでを含めたものかどうかは，設問文からは判断しづらかった点は評価しがたい。

問１　ホモロサイン図法に関する易問。昨年度は，本試験がメルカトル図法で，追・再試験が正距方位図法というセンター試験当時には定番の図法からの出題が復活していた。今年度の本試験では地図投影法からは出題されなかったが，追・再試験でホモロサイン図法から出題された。難易度は標準。

問２　地理院地図における起伏の読み取りに関する小問。地形の読み取りが苦手な受験者が多いことを考えると，難易度はやや高いか。

問３　地理院地図で取得可能な過去の空中写真と現在の標準地図とを比較して読み取る小問。空中写真中に潟湖との表示は加えられているものの，もう少し鮮明に判断できる写真の地域を用いることが望まれる。難易度は標準的。

問４　日本列島の夏と冬の気温と降水量に関する小問。近年定番となった形式の問い方で，難易度も低い。

問５　イラストに示された地形の模式図から２つの災害の危険性の高低を読み取る小問で，難易度は標準的。今後の教材として利用しやすい模式図が用いられている。

問６　噴石による被害の軽減を目的とした施設をキャプションが付けられた写真から選択する小問。火口監視カメラの設置は，間接的な被害の軽減を目指すものであるが，設問文からは直接的な被害の軽減を目指すものだけを選択するのか，間接的な被害の軽減を目指すものも含めて選択するのかが明確ではなく，改善を望みたい小問である。設問の曖昧さもあり正答率は低いと思われる。

第２問　「食文化を中心とした世界の生活・文化の多様性」　本試験の家畜に次いで，追・再試験でも食文化を基軸としたテーマ性のある大問が作成された。こうしたテーマの設定は，授業構想の際に参考となるので歓迎したいが，生活・文化の中でも言語や宗教などの分野からの出題が見られなかったように，出題分野や範囲の偏りが生じないようにする配慮が必要だと思われる。

問１　地域によるカロリー供給量の内訳の相違に関する小問で難易度は標準的。米と小麦の地域別の相違と，1963年と2013年との相違を問うもので，近年の共通テストらしい小問となっている。

問２　提示された写真からインドのものであることを読み取り，４か国について示された１人当たり食品別年間食料供給量の表からもインドを選択・判断する小問。他の３か国，特にタイの料理が提示されない上に，料理の写真にキャプションが設けられていないため，インドの料理と知っていることを前提とするのか，知っていないのであれば判断することはやや難しい。写真が提示される場合には，キャプションを付けることをお願いしたい。また，表から４か国を判別することも易しくはなく，難易度が比較的高い小問となっている。

問３　食文化の多様性が生まれる社会・経済的な背景についての易問。一方，日本食が広く受け入れられた理由となるｍに当てはまる文を選べるようになるために，受験者はどのような資料を根拠に学習すれば良いか，課題があるように思われる。

問４　食器のデザインに関する小問で難易度は標準的。ＪとＫのデザインについての判別は容易だが，Ｌが中国系のデザインであることは写真からだけでは判別しづらい。センター試験の時代であれば，３か国とＪ～Ｌの組合せか，３か国と**サ**～**ス**の組合せのいずれかの小問であったと思われる。共通テスト移行後，今回のような形式が増加し，求められる知識量と解答にかかる時間が増加している。また，本問は写真と文とを見れば，それぞれの写真と文がイタリアかイランか中国のものか分からずとも解答できてしまう。３か国についての知識を前提とせずに，その場での思考判断で写真と文とを組合せ選択させることが作問の意図かも知れないが，本問は，Ｊ～Ｌの写真に**サ**～**ス**の文をキャプションとして付け，３か国と写真を選択して組み合せる問いが良かったのではないかと思われる。

問５　プラスチック素材の生産量について示された図に関する文中の下線部の正誤判定の小問。①の「多様なデザインの食器の製造が可能になった」こととプラスチック素材の普及との因果関係は判断しづらいが，④の誤りが明らかで易問。

問６　これまでの探究活動をふまえての今後の調査についての小問で，難易度は標準的。

第３問　「ヨーロッパ」　ヨーロッパを対象としたさまざまな分野から出題されている。大問全体の難易度は高くない。第２問の生活・文化の大問でも出題がなかった言語や宗教に関する小問は，第３問においても出題されなかった。問１の自然環境に関する問いを除き，問２以降はヨーロッパの産業についての理解を求める小問が続き，「地理Ｂ」の産業に関する大問を，ヨーロッパを題材に作成した印象が残る大問となった。

問１　高低差を濃淡で示した図の３地点と各地点のキャプションのない写真との組合わせ選択の小問。オランダの風車とスイスの山岳氷河で解答は容易だが，図中の**ウ**地点に当たるＡの

写真は何を写したものか，何をヒントに判断させようとしたのか分かりづらい。写真サイズも小さいため，改善をお願いしたい問いである。

問２　ヨーロッパの内陸水路に関する文章選択問題の易問。正解はできるが誤文の内容が苦しい。

問３　４つの農産物について生産量上位国と生産量を示した図形表現図を判別する小問で，難易度は標準的。センター試験実施当時には定番であった形式のもので，統計的な知識を問うもので単純と捉える考え方もあるだろう。しかし，こうした簡易的な作りの問題は，受験者の解答時間を軽減し，他の思考・判断を要する問へ用いる時間を増やすためには効果的で，必要な問いであると思われる。

問４　ヨーロッパ諸国を比較した観光客の動向の差異について，定番の内容に関するもので難易度は標準的。

問５　ＥＵ加盟国と国別の一人当たりＧＤＰに関する図について，文の下線部の正誤を判定する小問。比較的易しい。

問６　ＥＵを含めた４つの国家群について４つの指標が示された表から判別する小問。ＥＵ設立のコンセプトが学習できており，地域内貿易額の割合に注目できれば解答は容易。

第４問　「地球的課題と世界の結びつき」　「世界の結びつきと地球的課題」と題された本試験同様のタイトルで，どちらも地球的課題から４問作問され，それぞれさまざまな地球的課題について出題された。受験者のこれまでの学習に応える上でも，特定の分野に偏るよりは，こうした大問の作成の方が望ましいのではないだろうか。世界の結びつきに関する２小問が，統計表を読み取って空欄に当てはまるものの組合せを選択する同一形式のものであった点は，作問の工夫の余地があったか。

問１　地域別の出生率と死亡率の推移に関する標準的な難易度の小問。

問２　食料問題に関する３つの階級区分図の組合わせ選択の小問。アフリカにも穀物自給率の高位に当てはまる国が多く判別しづらいため，難易度はやや高い。高位と中位の境界は何％に設定されて作成されたのだろうか。

問３　アラル海に関して述べた文の下線部の正誤判定の小問。湖面面積の縮小に１ページ分が費やされているが，図の読み取りが必要な下線部判定の選択肢は１つしかない。残り３つの下線部が知識だけで判定できた点は改善の余地がある。

問４　追・再試験「地理Ａ」中，資料が用いられなかった唯一の小問で難易度は低い。こうした問に正解するために授業を行う訳ではないが，妥当な判断力が身に付く授業とはどのようなものなのか考えさせられる小問だった。

問５　３か国の航空貨物輸送量を国際線と国内線に分けて示した表についての組合わせ選択の小問で，難易度は標準的。

問６　地域間の石油輸出入量に関する小問で，これも難易度は標準的。前問の問５と似た形式の問が続いた。

第５問　「入間市を含む埼玉県南西部の地域調査」　さまざまな図や表，写真，資料などが用いられた大問であったが，地形図（地理院地図標準地図）は出題されなかった。地形図の読み取りは「地理Ａ」第１問では出題されたものの，「地理Ｂ」第１問～第４問での出題は見られず，追・再試験「地理Ｂ」受験者にとっては，地形図を読み取る技能は必要のないものとなった。複数の小問において地形図や地理院地図等を用いての地形や，地域の変容に関して読み取る地理的技能についての出題が見られたり，考察する範囲を地域調査の対象地域よりも広げた小問が複数見られたりした昨年度の追・再試験の第５問の評価が高かったことを鑑みると，本年度

は入間市やその周辺の狭い範囲に関する問いから構成されており，考察する範囲を地域調査の対象地域よりも広げた範囲で，対象地域の特色を考察するような問いが少なかった。この点については改善を望みたい。

問１　地理院地図より作成した図を読み取って図中の３か所の断面図を判別する小問。丘陵に入る低地や，台地上に形成された丘陵についての高低差を読み取れれば正解を得られる。断面図の見せ方にも新しさがあり，工夫されているが，難易度はやや高い。

問２　雑木林の役割や利用に関する小問で，雑木林に関する知識が十分ではないと正解が得られない。難易度としては標準的。大問４の問４でも述べたが，Ｆの事例として適切な選択肢を選べるようになる力を身に付けるのに，どのような授業を行っていくべきか考えさせられる。

問３　台地での茶の生産に関して作成された資料に関して述べた文中の下線部の正誤判定の易問。

問４　大規模物流施設の立地に関しての会話文中の空欄に当てはまるものを選択する小問。図と表を読み取りながら，大規模物流施設の立地の変化について思考・判断するもの。受験者にとっては解答に手間のかかる問いであるが，地理的な技能や見方・考え方を問う工夫された良問と評価したい。

問５　郊外における農地の減少についての小問で，標準的な難易度。

問６　郊外地域における人口問題とその対策についての小問で難易度は低い。社会で生起する地理的な課題に対して，問題解決のための対策を考える学習は必要不可欠であるが，共通テストでの出題では，本問も含めて正答率の高い易問となりやすい。

３　「地理Ｂ」について（地理Ａとの共通問題を除く）

大問構成と内容については本試験と同様であった。追・再試験でも，図や写真，グラフ，表などの資料が豊富で，組合せ選択の小問も18問を数え，解答に多くの時間を要した。しかし，作り込み過ぎたと思われるような大問はみられなかった。全体を通じては，解答に迷う小問が散見され，平均点は本試験よりも低いのではないかと思われる。学習を重ねた生徒が着実に得点できるよう問題の作成を願いたい。

第１問　「世界の自然環境と自然災害」　大問タイトルは本試験と同様で，世界図が用いられなかったことも同様であった。昨年度も，本試験，追・再試験とも世界図は用いられておらず，世界全体を大観した小問はなく，それぞれの地域の自然環境の特色を問うものとなった。問１，問４，問６など，意欲的に作成された小問が多くみられたが，その分難易度は高い大問となったと感じられる。

問１　プレート境界付近の地震と火山の分布に関する小問。ペルー沖の沈み込むプレート境界に関する知識が必要で，やや難しい。

問２　２地点の夏と冬の風向に関する小問で，インド半島南西部の季節風が理解できていれば正解を得られ，標準的な難易度。

問３　日本列島の垂直的植生分布に関す易問。生物との重なりのあるテーマである。正答を見つけるまでに，図と文章を照らして判断するのに要する時間は多いと考えられるが，提示された図を読み取らなくとも誤りの文を選択できてしまう側面をもつ問いだったという点では改善を願いたい。

問４　地形の形成を時間スケールと空間スケールで捉える小問。昨年度本試験「地理Ｂ」の第１問の問１においても，気候や気象現象について同じく時間スケールと空間スケールで捉えるも

のが出題された。昨年度のものは，グラフ上に示された４つの現象に当てはまるものを選択する小問であったが，本年の小問は，３つの地形に当てはまるものを，その地形の形成要因が述べられた文と組み合わせて選択するもので，その分解答に要する時間も長くなり，難易度も高い。

問５　東南アジア・南アジアの自然災害に関する小問。赤道付近では台風やサイクロンによる被害が少なく，ヒマラヤ山脈では火山災害が少ないという知識から，３つの自然災害の分布図を判別する共通テストらしい小問で，難易度は標準的。

問６　与えられた初見の資料から思考・判断して解答を選択する小問。共通テストへの移行において目指された見方・考え方を重視した問であるが，時間を要し，難易度は高い。

第２問　「持続可能な資源利用と産業のあり方」　産業の分野は，本試験に続いて探究的な学習場面を想定した大問となった。こうした大問の場合，出題分野の偏りがみられることが多いが，本大問では偏りなく出題されており，評価できる。また，系統地理的な分野では，特定の地域に関する出題が続き，世界図が提示されないことも多い中で，２つの小問において世界図が提示され，出題内容についての世界的な大観ができているかどうかが問われた点も評価したい。

問１　各国の経済活動に関する４つの指標の上位20か国･地域が示され世界図を判別する小問で，難易度は標準的。それぞれの指標について世界的に大観できていれば解答可能で，こうした小問が第１問の自然環境分野でも望まれる。

問２　アメリカ合衆国の石油需給の推移に関する小問。シェールオイルに関する知識が理解できていれば易問。

問３　３か国の工業分野別生産割合とその背景に関する小問。背景について述べた文の判別は容易であるが，生産割合のグラフからの３か国の判別は難易度が高い。３か国の工業の特色については，もう少し分かりやすく示すことができるグラフからの判別が望ましかった。

問４　果実，牛肉，穀物の輸出入に関する小問。問２と同じく，食料の輸出入という事象を世界的な視点から大観することが求められたもので，難易度は標準的。上位となる３か国ごとに区切って表現する方法はやや目新しかったか。系統地理的な分野の大問では，こうした小問が大問ごとに少なくとも一つは欲しい。

問５　光化学スモッグに関して示された初見の資料について述べた文中の下線の正誤判定の易問。一方，多くの受験者の年齢層は光化学スモッグをリアルタイムで経験してはおらず，光化学スモッグで問う今日的な意義を明確に押し出してほしかったとの意見もあった。

問６　探究的な学習を振り返って話し合う近年定番の小問。これも易問。

第３問　「都市と人口，生活文化」　本試験に対して，タイトルに「人口」が加わった。タイトル通り，人口や生活文化に関する問いが複数問ずつ出題された。さらに，日本の人口と都市に関する問いも出題され，出題内容や地域についてはバランスよく出題された大問となった。また，問１，問３，問５のように，初見の資料をもとに考察させようとする作問は，センター試験から共通テストへの移行を十分に意識したものであったと感じる。

問１　19世紀後半のニューヨークの鳥瞰図についての文章選択問題。古い時代の鳥瞰図を用いた点は作問への意欲を感じるが，図の単純な読み取りの易問となっている点では工夫を期待したい。

問２　グラフ上に示された３つの市町村と，その市町村について示された文との組み合せ選択の小問。難易度は標準的。概念化・一般化して正答にたどり着く問題で，地理的な見方や考え方が試された良問。片ページに収まり，求められる資料の読み取り技能，文章量ともに適度だったと思われる。

問３　アフリカ系住民の文化であるブルースが演奏される飲食店の立地とその変化についての小問。資料に関する文中の下線部の正誤判定の易問であるが，シカゴにおけるアフリカ系住民の割合の増加とアフリカ系文化のブルースについて取り上げた視点は，工夫されたものとして評価したい。

問４　３か国の外国籍人口を男女別に示した表の組合せ選択の小問で，標準的な難易度。ペルシャ湾岸諸国で建設業等の雇用が多く，男性の外国人労働者が多くなっていることは多くの受験者が学習できていたと思われる。ドイツとギリシャでは，ドイツの方が外国人労働者の数は多いと判断するのが妥当。一方，アラブ首長国連邦，ドイツに次ぐ３つ目の国として本問ではギリシャが選ばれているが，どういった観点から選ばれたのかについてやや疑問が残る。

問５　年齢別にみた３都府県間の人口移動についての小問。初見の資料についての思考判断が求められたが，難易度は標準的。

問６　地域別にみたキリスト教人口と宗派別割合を示したグラフにおいて，アフリカに該当するものを判別する小問。カトリックの比率が高い中央・南アメリカ，正教の割合が高いヨーロッパの判別は容易だが，アフリカの方が人口は多く，キリスト教徒数も多いことへの理解が不足している受験者は多いと予想する。そもそも北アメリカに７億人の人口がないことに気づければ容易だが，総合して難易度はやや高い。

第４問　「南アメリカ」　昨年度は，追・再試験においても本試験のインドと中国に続いて，地中海を囲む北アフリカ，西アジア，ヨーロッパが出題され，本年度は本試験において環太平洋地域から出題された。いずれも教科書等で多く見られる標準的な地域区分とは異なるものであったが，本年度の追・再試験では，標準的な地域区分である南アメリカから出題され，受験者としては安心感をもって取り組めたのではないか。しかし，共通テストへの移行以降にＢパートとして設けられ出題されることが多い比較地誌に関する小問はみられなかった。内容的には，知識と関係して解答するものがやや多かったように思われる。来年度以降の新課程においては，個々の知識に基づいて判断するのではなく，地域全体に対する概観に基づき，資料を元に思考・判断することが可能な問いの作成が望まれる。

問１　同緯度に分布する３地点の雨温図の判別の小問。地点Ａは海岸砂漠の北端にあたることや，大陸東側の地点Ｃが乾燥帯に含まれるという知識は難易度が高く，正答率は低かったと思われる。標高情報が示された地図が鍵を握ったとも言いづらく，難易度とともに改善をお願いしたい。

問２　カルトグラムにより示された国別の３つの指標の判別に関する小問。太平洋側のペルーやチリが銅の産出国であり，日本への輸出総額が多いことは判別が容易だが，人口と森林面積の判別はやや難しい。

問３　コーヒー豆と大豆について示された統計資料からコーヒー豆を判別する小問で，難易度は標準的。

問４　アルゼンチン，コロンビア，ボリビアの３か国と，アメリカ合衆国，ＥＵ，自国以外の南アメリカとの貿易に関する小問。アメリカ合衆国に近いコロンビアがアメリカ合衆国との貿易額が多いことは判別しやすいが，アルゼンチンとボリビアの判別は受験者にとってはやや難易度が高い。図に示されたデータ以外にも，両国の判別が容易となる指標が示される必要があったのではないだろうか。

問５　４つの鉱産資源についての２つの指標から当てはまる国を判別する小問。それぞれの鉱産資源についての世界的な状況と，南アメリカでの状況に関する知識が必要で難易度はやや高い。この問も，問４同様，考察のもととなる指標の数が足りなかったのではないだろうか。

問６　ブエノスアイレスとブラジリアについて示された図をもとに述べられた文の下線部の正誤を判断する小問で，特徴的な街路形態をもつブラジリアが学習できていれば易しい。

第５問　「入間市を含む埼玉県南西部の地域調査」　（「地理Ａ」と共通のため省略。）

４　総評・まとめ・要望

大問数は,「地理Ａ」も「地理Ｂ」も５大問で本試験との相違はなかった。追・再試験においても，豊富な資料と組合せ選択の小問の多さなどにより，本試験と同様，解答に多くの時間を要し，見直す余裕は少なかったと思われる。新課程となる来年度は，小問数の見直しには好機と思われ，精選した資料と問数の中で，じっくりと思考・判断するものが作成されることを望みたい。

さまざまな資料の中で世界図を用いた小問は,「地理Ａ」で図法に関する小問を含めても３小問,「地理Ｂ」では２小問に過ぎなかった。現代世界の諸事象を世界的な視点で理解したり，世界を大観する中で地域の特色を考察したりするという視点は重要であり，世界図を提示したなかでの問題作成の増加が望まれる。

本試験と同様, 作り込み過ぎた小問は少なかったが,「地理Ｂ」ではややそうした小問がみられた。来年度は新課程入試１年目であり，共通テスト初年度のようなギャップに受験者が戸惑う出題がなされないよう願いたい。初見の資料等に向き合い，それまでに身に付けた知識を元にじっくりと思考・判断して正解を得る過程は重要であるが，一方でそうした問いが過度に多くならないよう，全体のバランスに配慮した作問を願いたい。